volume 99
SEPTEMBER 2006

HABATAKI
はばたき
UNIVERSITY OF SHIZUOKA

52-1 Yada,Suruga-ku Shizuoka-shi Shizuoka-ken 422-8526 Japan

inside NEWS

●CONTENTS●

オープンキャンパス……1
県民の日イベント……2
夏休み親子環境教室……3
法人化情報……3
著書紹介……4
研究助成採択……4
受賞……4
名誉教授の称号授与……5
奨学金授与……8
図書館だより……11
教員の人事……12
クラブ・サークル紹介……13
留学体験記……15
経営情報学部「オープンレクチュア」……17
ファーマカレッジ2006……17
国際交流……18
谷田風土記……19
食品栄養科学展示コーナーの開設……19

「見て」「聞いて」「触れる」オープンキャンパス開催！

8月7日(月)から9日(水)までオープンキャンパスを開催し、本学への入学希望者を対象として、学部の説明や施設の案内などを行いました。前半は猛暑、後半は台風7号による天候悪化のなか、高校生やその保護者など延べ3,000人を超える参加者で賑わいました。

7日は薬学部と国際関係学部が、8日は食品栄養科学部と経営情報学部が、9日は看護学部が、学部学科のカリキュラムや入学者選抜に関する説明後、キャンパスツアーや模擬授業、教員及び在学生との懇談・意見交換会やキャンパスライフの紹介など、それぞれ趣向を凝らしたプログラムで参加者に各学部の魅力をPRしました。

その他、学生部に相談コーナーが設けられ、ここでも参加者が過去の入試問題を入手したり、学生生活などについて熱心に相談したりしていました。

学部ガイダンス

薬学部：模擬講義「副作用の少ない薬をつくるための化学」

食品栄養科学部：食品栄養科学展示コーナー

国際関係学部：模擬授業「コンピュータ・リテラシー」

経営情報学部：在学生との意見交換会

看護学部：専門基礎実習室

県民の日イベント

明治9年8月21日に静岡県が誕生したことを記念し、平成8年度に制定された「県民の日」の諸行事が、8月21日(月)を中心に県内各地で開催されました。静岡県が誕生して130年目の今年は、本学においては、大学構内見学会の「キャンパス・ツアー」と「環境科学研究所の一般公開」が行われました。

県大をもっと身近に!! 「キャンパス・ツアー」開催

キャンパス・ツアーは、県民の方々や県大に進学を希望している生徒に対して、学内を見学していただき、県大に親しみを持ってもらうことを目的に開催しています。

本年は、8月21日(月)にキャンパス・ツアーを開催し、県外からは愛知県、岐阜県等から、また、県内各地から参加があり、高校生を中心に小学生から御高齢の方まで、募集人員を超える103人の参加がありました。参加者は4グループに分かれて大学職員の誘導により各学部棟や図書館を見学しました。実習室、研究室等では、教員から説明を受けたり、LL教室では模擬授業を、また、遠隔講義システムを体験し、県大の施設・設備・研究内容などに感心していました。

また、本年は、高校生の希望者を対象に入試ガイダンスを行いました。

参加者からは、「感じがとても良く、絶対にこの大学に入学したいと思った。」、「いろんな説明が聞けて勉強になりました。」などの声が聞かれました。

キャンパス全景説明

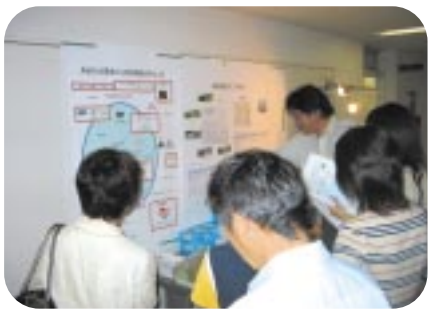
健康支援センター訪問

ＬＬ実習

遠隔講義システム体験

環境科学研究所を一般公開！－身の回りの環境問題を楽しく学ぶ－

環境科学研究所では、8月19日(土)に、研究所の活動内容を県民の方々に広く知っていただくとともに、身の回りの環境問題に対して理解を深めていただくことを目的に、一般公開を行いました。当日は、朝から暑い一日であったにもかかわらず、ご家族連れや高校の生徒さんを中心に、148名もの大勢の方に参加していただきました。研究所の13の研究室では、日ごろ取り組んでいる研究活動を紹介する展示コーナーを設けるとともに、身の回りの環境問題を楽しく学ぶ簡単なデモ実験を行いました。積極的に実験に参加される方、教員や大学院生の説明に熱心に耳を傾ける方、質問を熱心にされる方など、様々な光景が見られました。また、「研究内容がはじめて知ることばかりで驚いた」、「実験が楽しかった」、「環境の大切さがよくわかった」などの声が聞こえ、大変好評でした。


研究紹介（水質・土壌環境研究室）

デモ実験（反応化学研究室）

～親子で環境問題について考えよう！～

夏休み親子環境教室を開催

環境科学研究所・地域環境啓発センター主催で、小学生の児童とその保護者を対象とした夏休み親子環境教室が、8月26日（土）に実施されました。これは、環境問題の解決には、小さい頃から環境問題に目を向けることが大切ではないかという発想で研究所の若手教員が中心となって行っている事業で、今年は3回目を迎えます。さらには実験を通じて、自然科学に親しみを持つ子供たちを増やしていきたいという願いも込められています。

本環境教室の参加者にはリピーターもいることに配慮して、内容も年々少しずつ入れ替えて実施しており、今年は午前午後合わせて4時間かけて10のテーマで実験を行いました。内容の一部を紹介すると、廃ペットボトルから繊維を作ったり、廃牛乳パックからはがきを作ったりすることにより、プラスチックや紙のリサイクルについて学ぶ実験や、花火を調合し、燃やしてみることによって酸性雨について学ぶ実験や、日光写真を作ることによって太陽光線の力について学ぶ実験などを行いました。一番人気はシャボン玉を作るコーナーで、界面活性剤の働きについて説明を受けながら、大きなシャボン玉を作る実験は、大人も十分楽しめる実験だったようです。参加者のアンケートからも、楽しく学習していただけたようでした。また、今年はテレビのニュースでも二社で取り上げていただき、紹介していただきました。

牛乳パックではがきを作ろう

巴川の水の水質を測ってみよう

●静岡県立大学の法人化情報

静岡県立大学事務局大学改革室

＜静岡県立大学の法人化＞

静岡県立大学は、静岡県によって設置された公立大学で、県の組織の一部となっています。「法人化」とは、地方独立行政法人法という法律に基づいて、県が「公立大学法人」を設立し、その下に県立大学を置くという設置形態の変更を言います。

「法人化」は、既に国立大学について一斉に実施され、公立大学についても次々に実施されています。静岡県立大学では平成19年4月を目途に法人化の準備を進めています。

＜法人化Q＆A＞

Ｑ１　なぜ法人化するのですか？

Ａ１　社会が成熟化する中で、「知の創造の拠点」と言われる大学は高等教育機関として、また新たな知識や技術の発信源として、地域社会や産業界からますます大きな期待が寄せられています。

こうした中で、「法人化」は、行政機関の一部であることに伴う規制を緩和し、より自主・自律的で、機動的、効率的な大学運営により、教育研究の一層の活性化と個性豊かな魅力ある大学づくりを進めようとするものです。

Ｑ２　学生にとって何が良くなりますか？

Ａ２　「法人化」によって、大学は予算や組織面での自由度が大きくなりますから、各大学の判断で、学生や社会のニーズを踏まえながら弾力的に教育内容の見直しや工夫などができるようになります。

法人化を契機に、これまで以上に学生サービスの向上につながるよう大学運営を行っていきたいと考えています。

Ｑ３　授業料はどうなりますか？

Ａ３　公立大学は、県内の学生を中心に低廉な費用負担で高等教育の機会を提供するという役割を担ってきており、その重要性は法人化後も変わりません。

大学が法人化された後も、このような役割の重要性を考慮した上で、授業料等については、県議会の議決を経て知事の認可によりあらかじめ金額の上限を決めておき、その範囲の中で金額を決める仕組みになっています。

本学教員の著書紹介

『ワサビのすべて』

学会出版センター、全203頁、
2006年5月15日刊行、定価2,625円

食品栄養科学部　教授　　木苗　直秀

沢ワサビ（*Wasabia japonica*）はわが国古来の香辛料であり、刺身、寿司、蕎麦などに供え物として欠く事はできない。その歴史は、奈良時代の飛鳥京跡苑池遺構より見つかった木簡までさかのぼる。薬用として利用されていたものが、江戸時代から薬味として一般の人々にも親しまれるようになった。わさびの辛味成分であるアリルイソチオシアネート類を含む数種のチオシアネート類は抗菌、抗カビ、抗変異、抗発がん、抗酸化、抗血小板凝集、骨形成促進などの作用を有することが次第に明らかとなってきた。このたび出版した「ワサビのすべて」（著者：木苗直秀、小嶋操、古郡三千代、発行所：学会出版センター）では我々の研究データを含め、わさびについての歴史、栽培法、生産、生理作用、利用法等について400余りの文献を用いて整理したもので、まさにワサビ情報の集大成と自負している。2003年に発刊した「沢わさびについて聞こう・知ろう」をあわせて御参照いただけたら幸いである。

なお、本書の発行にあたり適切な御助言を頂いた故　小嶋操先生（元静岡薬科大学助教授、元福岡大学教授）、及び文献収集を含め御尽力を頂いた本学客員共同研究員の古郡三千代博士に心より謝意を表したい。

『ユビキタス・コンテンツビジネスのすべて』

PHP研究所、全254頁、2006年5月22日刊行、定価1,575円

国際関係学部　教授　　前坂　俊之

今、日本だけでなく世界の国々の社会、生活、経済などのトレンドを理解するには、インターネットの進化を知る必要があります。インターネットの進化こそ世界を変える最大の要因です。数年前から、私のコミュニケーション論では『ユビキタスネットワーク』をテーマに、学生とともに勉強しており、その成果がこの本に結実しました。

世界に先駆けて日本は「ユビキタス社会」の本番へ。ケイタイ、携帯パソコン、ICチップ、デジタル家電、iPod、センサーなどで「いつでも」「どこでも」「だれとでも」「どんなものとでも」「どんな端末からでも」スピーディーに、自由自在に情報へアクセスできる『web2.0』の世界が誕生。あらゆる分野で『ユビキタス・コンテンツビジネス』が爆発的に成長しています。本書はその市場、発展性、サービス、コンテンツ、著作権、課金システムなど問題点をわかりやすく図解して解説しています。今後の少子高齢化社会の諸問題を解決するにはユビキタスネットほど有効な手段はありません、学生とともに今後も、続編を作っていきたいと思っています。

研究助成採択

平成１８年度（社）京都府茶業会議所　茶学術研究助成

研　究　者：本学21世紀COE特別研究員　小林　葉子
研 究 課 題：脳内における緑茶成分テアニンの代謝経路と神経保護作用機構の解析

受賞

「IOF-ANZBMS 2006 Travel Award」を受賞

大学院生活健康科学研究科代謝調節学研究室の中川妙子（博士課程3年、日本学術振興会特別研究員）さんと同研究科博士課程をこの3月に修了した内山聡志（本学客員共同研究員、日本学術振興会特別研究員）博士が「IOF-ANZBMS 2006 Travel Award」を受賞されました。

この賞は、第24回日本骨代謝学会学術集会（7月6～8日、東京）で研究発表された演題の中から、学会賞等選考委員会が優秀演題を選定し、若手研究者に授与されたものです。この10月にオーストラリアで開催されるIOF-ANZBMS 2006において研究発表するためのTravel Awardです。

「IOF-ANZBMS 2006」は、国際骨粗鬆財団（International Osteoporosis Foundation；IOF）の第3回アジア太平洋領域会議と第16回オーストラリア・ニュージーランド骨代謝学会（Australian & New Zealand Bone & Mineral Society；ANZBMS）の年会との合同会議で、2006年10月22～26日にオーストラリアのポートダグラスで開催されます。

なお、受賞演題は、「新規蛋白質レギュカルチンは腎近位尿細管上皮細胞におけるカルシウム関連シグナル系を制御している」（中川妙子、山口正義）並びに「β-クリプトキサンチンによる破骨細胞のアポトーシス誘導とその骨吸収活性の制御」（内山聡志、山口正義）です。同じ研究室から二演題が受賞したことはまれなことであります。

名誉教授の称号授与

鈴木　康夫　先生（前薬学部･大学院薬学研究科教授）

鈴木康夫前教授は、浜松北高等学校を卒業し、静岡薬科大学に入学、昭和39年3月同大学を卒業、昭和41年3月同大学・大学院薬学研究科修士課程を修了後、同大学院薬学研究科博士課程に進学、昭和42年3月博士課程を中退され、同年4月より静岡薬科大学生化学教室の助手に任用されました。その後、昭和49年4月に講師、昭和58年4月に助教授に昇任され、昭和55年より1年間は米国ペンシルバニア大学医学部に客員研究員として留学、昭和62年静岡県立大学開学後、平成元年10月に同大学薬学部教授（生化学講座）に就任されました。

この間、各種委員会の委員、静岡県立大学評議員、薬学研究科長、薬学部長を歴任され、39年間の長きにわたり、静岡薬科大学、静岡県立大学で研究、教育並びに大学の発展に貢献されました。

研究面では、インフルエンザウイルス等の糖鎖受容体の構造解析とウイルス感染機構に関する研究で多くの世界的な成果をあげられ、ウイルス感染における糖鎖機能の重要性を先駆的に解明し、その成果を新規抗ウイルス薬開発の基盤創生に応用されました。

これまでの研究成果は、150編を超える原著論文、60編を超える総説、28編の著書として発表され、平成16年3月に日本薬学会から薬学会賞を、また同年5月に第57回中日文化賞を受賞されるなど、生化学における功績は多大であります。

学会活動としては、日本薬学会、日本生化学会、日本ウイルス学会、日本癌学会、日本糖質学会、日本神経化学会、日本エイズ学会、日本免疫学会、日本炎症学会、アメリカ微生物学会、日本脂質生化学会に所属され、日本生化学会評議委員、日本ウイルス学会評議委員、日本脂質生化学会幹事、日本脂質栄養学会評議員に加え、平成10年度日本薬学会東海支部長、平成11年度日本生化学会中部支部長、日本糖質学会副会長を歴任され、学会の発展に尽くされました。

教育に関しては生物化学、基礎ウイルス学、基礎糖鎖生物学、生化学特論（大学院）等の講義を担当され、学生の教育に意欲的に取り組まれるとともに、後進の指導育成にあたられました。また、オーストラリアのグリフィス大学との国際交流協定、タイ王国マヒドン大学熱帯医学部・薬学部との学部間協定の締結にも御尽力されました。

中山　貢一　先生（前薬学部・大学院薬学研究科教授）

中山貢一前教授は、東京都に生まれ、昭和40年3月東京大学薬学部を卒業されました。三共株式会社に入社後、東北大学医学部薬理学教室（橋本虎六教授）に内地留学され、昭和48年東北大学より医学博士を授与されました。その後、ドイツフライブルグ大学生理学研究所研究員、帝京大学薬学部助教授を経て、昭和60年7月から静岡薬科大学教授、昭和62年からは静岡県立大学薬学部教授として、薬理学講座を主宰されました。この間、静岡薬科大学、静岡県立大学で研究、教育並びに大学の発展に貢献されました。

同教授は、“循環系におけるバイオメカニクス反応と薬物による制御”を研究命題に掲げて精力的に研究を行い、血圧・血流や心臓・血管の収縮・弛緩などの血行力学刺激が重要な循環調節因子であるとともに、血管の肥厚や動脈硬化、高血圧、血管攣縮の発症や進展とも深く関わることを証明されました。これまでの研究成果は、100編を超える原著論文、70編を超える総説、著書として発表され、循環薬理学研究における功績は多大なものがあります。

また、日本薬理学会、日本薬学会、日本生理学会、日本脈管学会、日本糖尿病学会、日本循環薬理学会、日本心脈管作動物質学会、日本血管生物医学会、日本循環器学会、日本平滑筋学会、日本生物物理学会、米国心臓学会、米国生理学会、米国科学振興協会など数多くの学会に所属され、日本薬理学会評議員、日本薬学会評議員、日本平滑筋学会評議員、日本薬学会東海支部幹事として御活躍されました。

教育面では、薬学部における薬理学、機能形態学、生物学的試験法、大学院薬学研究科における薬理学特論、分子薬理学特論、情報薬理学特論、治験・臨床開発特論、加えて、食品栄養科学部における臨床薬理学、看護学部における薬理学等の講義を担当され、学部及び大学院学生の基礎薬学や医療薬学教育に意欲的に取り組まれ、後進の指導育成にも積極的に当たられました。

さらに、本学運営に当たって、初代情報システム委員会委員長として教育・研究面では必須のものとなった情報システムの再構築に取り組み、現在の本学情報システム構築の基盤を、また、全学図書館委員会委員長、全学動物実験センター運営委員長として、各部門の運営、発展に寄与されました。学部にあっては薬学科主任、各種委員会の委員長等を歴任され、特に薬剤師国家試験対策委員長として本学薬学部卒業生の国家試験合格率向上に格段の功績をあげられました。

竹石　桂一　先生（前食品栄養科学部・大学院生活健康科学研究科教授）

竹石桂一前教授は、昭和39年3月に東京大学薬学部を卒業され、昭和43年3月に同大学大学院薬学研究科博士課程を中途退学後、同年4月より東京大学薬学部の助手に任用されました。酵母メチオニンtRNAの生化学的研究によって昭和45年5月薬学博士（東京大学）の学位を授与され、昭和47年3月より米国ペンシルバニア大学において、昭和49年4月よりニューヨーク州立大学において博士研究員として研鑽を積まれました。昭和50年11月に着任された埼玉県立がんセンター研究所主任研究員を経て、昭和62年10月に静岡県立大学食品栄養科学部食品学科教授に就任されました。遺伝子工学研究室の主任教員として遺伝子工学の講義や遺伝子工学実験などを担当され、学生の教育、研究指導に従事されました。平成3年4月に静岡県立大学大学院生活健康科学研究科が新設されるに当たり、同研究科食品栄養科学専攻の遺伝子工学の教授に任用され、遺伝子工学特論等の講義を担当するとともに、大学院生の教育、研究指導に従事されました。主として、高等生物の細胞増殖必須遺伝子の構造と発現調節、ビタミン誘導性の細胞分化におけるシグナル伝達及び茶葉成分による癌細胞の増殖阻害の分子機構に関して研究され、それらの成果を多くの英文誌に発表されています。

大学の管理運営面では、食品栄養科学部長を4年、生活健康科学研究科食品栄養科学専攻長を4年務められ、さらに、12年にわたって評議員を務めるなど、大学の管理運営にも尽力されました。また、開学当初の本学における組換えDNA実験の実施体制の確立や安全管理に長年にわたり貢献されました。

学会活動では、日本分子生物学会、日本薬学会、日本癌学会、日本生化学会、日本レチノイド研究会等において活躍され、また、社会活動においては、静岡県商工労働部プロジェクト研究評価委員会委員、静岡大学及び静岡県農業試験場の組換えDNA実験安全委員会委員、日本分子生物学会年会組織委員会委員、静岡健康長寿学術フォーラム実行委員会委員として活動されました。

伊勢村　護　先生（前食品栄養科学部・大学院生活健康科学研究科教授）

伊勢村護前教授は、昭和43年3月大阪大学大学院理学研究科博士課程を単位修得満期退学後、同年4月より同大学理学部化学科生物有機化学教室の助手に任用されました。タカアミラーゼの基質特異性に関する研究によって同年9月理学博士（大阪大学）の学位を授与され、10月より米国ボストン大学においてリサーチフェローとして糖蛋白質の研究に従事されました。昭和46年4月新潟大学医学部助教授（生化学）、昭和55年5月東北大学医学部助教授（医化学）、昭和61年4月静岡女子大学教授（栄養化学）を経て、昭和62年4月に静岡県立大学食品栄養科学部栄養学科教授となり、生化学研究室の主任教員として、生化学の講義や生化学実験を担当し、学生の教育、研究指導に従事されました。平成3年4月に静岡県立大学大学院生活健康科学研究科が新設されるに当たり、同研究科食品栄養科学専攻の細胞生化学研究室教授に任用され、細胞生化学特論等の講義を担当するとともに、大学院生の教育、研究指導に従事されました。主として細胞接着因子の構造と機能、食品成分による癌抑制、食品成分による遺伝子発現制御に関して研究され、それらの成果を多くの英文誌に発表されています。

大学の管理運営面では、食品栄養科学部長を4年、生活健康科学研究科長を2年、附属図書館長を2年務められ、倫理委員会委員長、図書館情報委員会委員長、学長補佐などを歴任し、10年以上にわたって評議員を務めるなど、大学の管理運営に尽力されました。また、平成17年度には 厚生労働大臣表彰（栄養士養成功労者）を受けられました。

学会活動では日本生化学会、日本結合組織学会、日本癌学会、日本細胞生物学会、日本農芸化学会、日本カテキン学会、茶学術研究会では評議員や役員として活躍され、また、社会活動として、文部省学術審議会専門委員（科学研究費分科会）、静岡健康長寿学術フォーラム組織委員、世界O-CHA学術会議実行委員など幅広く活動されました。

有泉　學宙　先生（前国際関係学部･大学院国際関係学研究科教授）

有泉學宙前教授は、昭和40年に信州大学文理学部人文科学科を卒業され、長野県立長野工業高校で教鞭をとられた後、立教大学大学院文学研究科（英米文学専攻）に進み、昭和46年に文学修士を授与されました。その後、立正女子短期大学文学部非常勤講師、東海大学文学部講師を経て、昭和50年から静岡県立静岡女子大学文学部講師、昭和51年には同助教授、昭和62年からは静岡県立大学教授となられました。昭和55年から56年にかけて、フルブライト研究員としてニューヨーク市立大学クイーンズカレッジにて研鑽を積まれたほか、静岡大学の一般教養及び人文学部、常葉学園大学、立教大学、静岡英和女学院短期大学、信州大学、愛知県立大学、放送大学で非常勤講師を歴任されています。

教育面では、国際関係学部における米文学史、英米の社会と文学、原典講読、英作文及び大学院国際関係学研究科比較文化専攻におけるアメリカ文化研究、英米文化研究方法論の講義科目を担当され、学部、大学院学生教育へのその丁寧な取り組みは著しい効果をあげました。また、学外講演等により市民教育にも尽くされ、地域社会にも大きく貢献されております。

研究面では、アメリカ演劇に焦点を絞られ、なかでも代表的劇作家であるアーサー・ミラー、テネシー・ウィリアムズ、ユージン・オニールに関する研究に力点を置き、人間存在そのものの普遍的問題への取り組みとして文学作品の普遍的意味の解明に努められました。また、社会的存在としての人間の問題を、アフリカ系アメリカ人演劇を通してアメリカにおける人種問題の象徴的事例として解読する一方、ブロードウェイ、オフ・ブロードウェイ、オフ・オフ・ブロードウェイ等、現代アメリカ演劇のアメリカ社会・文化における位置付けを探られ、日本での研究業績の薄い分野にも多大の足跡を残されました。その研究成果は、『アーサー・ミラー』『アフリカ系アメリカ人演劇の展開』等の著書を始め、40編余の共著、論文、書評として刊行され、我が国のアメリカ文学研究に幅と深みをもたらされました。また、学会活動としては、日本アメリカ文学会、アメリカ学会、全国アメリカ演劇者会議、中部日本英文学会に所属し、学会パネリストやコメンテーター、司会、学会誌編集委員としても活躍されております。

大学運営にあたっては、静岡県立大学評議員及び国際関係学研究科専攻長を務められたのを始めとして、大学院連絡協議会委員、倫理委員会委員、セクシャルハラスメント防止対策委員会委員、学長選挙規程検討委員会委員、学長選挙管理委員会副委員長等各種学内委員会の委員を歴任され、それぞれの部門の充実・発展に尽力、貢献された功労は多大であります。

横田　勇　先生（前環境科学研究所・大学院生活健康科学研究科教授）

横田勇前教授は、昭和40年4月東京大学理学部地学科卒業後、昭和42年4月同大学工学部都市工学科に学士入学され、昭和44年5月同学科を卒業、同年6月厚生省環境衛生局公害部に入省されました。環境庁環境影響審査官、国立公害研究所研究企画官、厚生省産業廃棄物対策室長を歴任され、静岡県企画部技監出向を経て、平成3年3月に厚生省を退官されました。同年4月静岡県立大学大学院生活健康科学研究科の発足と同時に同研究科環境物質科学専攻の助教授に任用され、平成7年7月同研究科教授、平成9年4月環境科学研究所創立に伴い研究所教授に就任されました。環境科学研究所（環境物質科学専攻）では、環境政策研究室（旧環境行政法規研究室）主任教授として、環境政策特論、環境化学特論を担当され、廃棄物管理を中心とした都市環境政策、環境アセスメント等の環境管理及び発展途上国との環境技術協力に関する実証的な教育・研究を通じて、大学院生の教育や研究指導に精力的に取り組まれました。

大学での管理運営面では、環境物質科学専攻長を1年半務めたほか、環境安全委員会（旧排出物処理施設等管理委員会）委員長や産業廃棄物特別管理責任者、規程委員会、将来構想委員会、国際交流委員会、図書館・情報委員会、学生部委員会、留学生委員会、教務委員会、入試実施委員会などの委員を歴任し、大学の管理運営に尽力されました。

環境政策という専門分野の性格上、行政や各種環境関連団体等から専門的知見、アドバイスを求められる機会が多く、静岡県環境アドバイザーや静岡県環境影響審査会、静岡県公害審査会、静岡市環境審議会等の各委員、各種法人の理事や評議員、静岡文化芸術大学非常勤講師等を多数歴任されたほか、国際面においても、国際協力機構（JICA）環境保全分野の長期専門家、産業廃棄物技術移転国際セミナー団長、スリランカ地方都市、カトマンズ盆地等JICAの都市廃棄物管理計画調査に係る国内支援委員会の委員長として参画され、学会においても国際固形廃棄物協会（ISWA）Year Book編集委員、廃棄物学会理事兼国際委員長（2期）を歴任し精力的に活躍されました。

奨学金をありがとうございます

「日本平留学生基金」入学祝金贈呈式

日本平留学生基金（代表イトウ秀雄氏）贈呈式が5月25日に本学で行われ、今年入学した学部及び短期大学部の留学生8名全員（国際関係学部6名、経営情報学部1名、短期大学部1名）に1人ずつ入学祝金1万円が贈呈されました。

日本平留学生基金は、県立大学に在学している、主として東南アジアからの留学生に金銭的援助を行うことを目的として、平成8年にイトウ秀雄氏の還暦記念に設立された基金で、今年で11年目を迎えました。イトウ氏の基金募集の趣旨に賛同した協力者は500を超える個人・団体にのぼります。

贈呈式でイトウ代表は「健康に注意するとともに多くのことを学び、地域や国のために役立てて欲しい」と挨拶し、留学生を代表して国際関係学部1年郭榮善さんが「（イトウ氏への）感謝の気持ちを忘れずに充実した学生生活を送りたい。」とお礼の言葉を述べました。

「富士川町静岡県立大学留学生就学奨励金」交付式

富士川町文化事業振興会が支給する就学奨励金の交付式が6月24日、富士川町中央公民館で行われ、学部1年の留学生7名全員に1人あたり8万円が支給されました。

この就学奨励金は、本学に在学する優秀な留学生に就学奨励金を交付し、留学生の教育・研究活動を支援するとともに、富士川町が主催する事業を通じて、留学生と富士川町民との相互の心の触れ合いを深め、国際交流を図ることを目的としています。

交付式では坪内伸浩富士川町長が挨拶し、留学生を代表して国際関係学部1年デシャニ　ニサンサラさんがお礼の言葉を述べました。

地元企業からの奨学金

奨学生を募集する企業がそれぞれ論文テーマを定め、応募論文が優秀であると認められた学生に贈られる奨学金です。

「万城食品奨学金」授与式

㈱万城食品奨学金授与式が5月12日に三島市の万城食品本社にて行われました。

本奨学金は、㈱万城食品により中国出身の留学生への奨学金支給を目的として設立され、今年度で10回目を迎えました。本年度は、昨年度に引き続き国際関係学部3年赵亭さんが選ばれました。

授与式では、㈱万城食品の米山寛代表取締役から目録を贈られ、赵亭さんがお礼を述べました。

「静清信用金庫奨学金」授与式

静清信用金庫奨学金授与式が6月15日に静岡市葵区の静清信用金庫本店で行われました。

本奨学金は、地域に生きる静清信用金庫の基本方針に従い、次代を担う人材育成を目的に設立され、今年度で10回目を迎えました。

「私が考える信用金庫の顧客サービス」を論文テーマに募集し、食品栄養科学部2年山根由李恵さんと経営情報学部3年杉浦圭佑さんが選ばれました。

授与式では、静清信用金庫の白鳥良作理事長から認定書を贈られ、「パソコンの購入費や各種セミナーの参加費として、奨学金を有効に使わせていただきます。」（杉浦さん）など、奨学生がそれぞれお礼の言葉を述べました。

「TOKAI奨学金」授与式

㈱TOKAI奨学金授与式が6月21日に本学で行われました。

本奨学金は、㈱TOKAIにより地域に密着した企業の事業の一環として設立され、今年度で15回目を迎えました。

「地震時の情報通信の役割と問題点の解決策」を論文テーマに募集し、国際関係学部4年髙橋永次さん、薬学研究科修士課程2年福家さゆりさん、経営情報学研究科修士課程1年張正義さんが選ばれました。

授与式では、㈱TOKAIの真室孝教常務取締役から認定書を贈られ、「奨学金は書籍の購入や学会の参加費に充て、研究で成果を出すことで社会貢献をしたいと思います。」（福家さん）など、奨学生がそれぞれお礼の言葉を述べました。

「静岡ガス奨学生」認定証授与式

静岡ガス㈱奨学生認定証授与式が6月26日に静岡市駿河区の静岡ガス㈱本社で行われました。

本奨学金は、静岡ガス㈱により、社会有用の人材育成に寄与することによって地域社会への貢献を図ることを目的に創設され、今年度で7回目を迎えました。

「自分自身の将来像について」を論文テーマに募集し、国際関係学部3年蔡翔さん、薬学研究科修士課程1年鶴田敦さんが選ばれました。

授与式では、静岡ガス㈱岩崎清悟代表取締役社長から認定証を贈られ、「勉学に対する意欲や、目指すところに向かって励む様子が伝わってきた。お役に立てればうれしい。」と激励を受けました。

「天野回漕店奨学生」認定書授与式

㈱天野回漕店奨学生認定書授与式が7月11日に本学で行われました。

本奨学金は、㈱天野回漕店により「共存共栄」の経営理念に沿って地域社会の発展に努め、地元静岡県の学生の奨学勉励に寄与することを目的に設立され、今年度で12回目を迎えました。

「自国と日本文化の違いについて。又、日常生活で感じていること。」等を論文テーマに募集し、経営情報学部2年ダォ チュイ ユウンさん、国際関係学部2年俞艶丽さん、同2年王福慶さんが選ばれました。

授与式で㈱天野回漕店の小松信介取締役社長は、「日本だけでなく母国のこともよく勉強し、客観的な見方で国際理解ができるようになってほしい。」と激励の言葉をかけられ、奨学生がそれぞれお礼の言葉を述べました。

「南富士産業奨学金」授与式

南富士産業㈱奨学金授与式が7月18日に本学で行われました。

本奨学金は、南富士産業㈱により、向学心に燃える優秀な学生を援助し、国際社会、文化に貢献する人材育成の一助とすることを目的として設立され、今年度で10回目を迎えました。

同社商品「花茶」の販売拡大の方法に関する論文を募集し、国際関係学部4年多田賢吾さんが選ばれました。

授与式では、南富士産業㈱の杉山定久代表取締役社長から奨学金を贈られ、多田さんが「研究に関する書籍の購入費として、奨学金を有効に活用したいと思います。」とお礼の言葉を述べました。

「清和海運奨学金」授与式

清和海運㈱奨学金授与式が8月2日に本学で行われました。

本奨学金は、清和海運㈱により、地域に密着した企業として経済的に就学困難な学生の援助をすることを目的に設立され、今年度で4回目を迎えました。

「航空機貨物の需要と静岡空港開港における新たな物流の可能性」を論文テーマに募集し、看護学部3年北川万理子さん、薬学研究科修士課程1年磯部洋一郎さん、生活健康科学研究科修士課程2年加藤綾子さんが選ばれました。

授与式では、清和海運㈱の宮崎總一郎代表取締役社長から認定書を贈られ、「看護の実情を把握するため、現場に出かける費用などに奨学金を利用したいと思います。」（北川さん）など、奨学生がそれぞれお礼の言葉を述べました。

「駿河精機奨学金」授与式

駿河精機㈱奨学金授与式が8月16日に本学で行われました。

本奨学金は、駿河精機㈱により、経営理念の《天意創造》のもとに地域に密着した企業を目指し人材開発の一環として設立され、今年度で11回目を迎えました。

「人生で感動したこと」を論文テーマに募集し、国際関係学部2年松野下琴美さん、生活健康科学研究科修士課程2年植草義徳さんが選ばれました。

授与式では、駿河精機㈱の小沢幸雄管理部長から奨学金を贈られ、「県大生、奨学生としてふさわしい学生となり、後輩の指導にもあたっていきたいと思います。」（植草さん）など、奨学生がそれぞれお礼の言葉を述べました。

図書館だより

シリーズ　『私の1冊の本』

図書館では、利用者への読書推進の一環として、先生方が読んで感動し、心に残った本を紹介しています。

松森 奈津子　　国際関係学部 講師

紹介図書名：人生の短さについて
（岩波文庫 青607-1）
著　者　名：セネカ（茂手木元蔵訳）
出 版 社 名：岩波書店
ＩＳＢＮ：4003360710
図書館所蔵：2階自由閲覧室（推薦図書コーナー）
131.5/Se61

小さいころから、学校の勉強は嫌いだったが、読書は好きだった。『車輪の下』、『罪と罰』、聖書、『論語』、『三国志演義』、『芋粥』、『安土往還記』、『竜馬がゆく』・・・・・・人生の節目で影響を受けた本は多い。

なかでも、標記の図書は、職業選択に決定的な影響を及ぼしたという点で、印象に残っている。まだ新任講師であった恩師の「政治思想史」を履修したのをきっかけに、漠然と研究者の道に進みたいと思うようになっていたが、かなり迷ってもいた。長年の勉強嫌いがたたり、同期と比べてかなりデキが悪い。くわえて、フツーに就職すれば得られるはずの多くのもの――とくに、安定した生活――をあきらめ、将来を棒にふる大きなリスクを背負うのが、いやだった。

そんなとき、自分にとって一番大切なものは何かということを再考させてくれたのが、この本である。いわく、人生は短い。それは、自分を取り巻く環境ばかりに注意がいってしまい、自分自身の生を生きていないからである。地位や、金や、他人の評価を気にかけて、死ぬその瞬間まで、他人のために、時間を浪費しているからである。使い方を知れば、人生は長い。毎日を最後の一日と考え、貪欲さや野心を離れて自分に誠実に生きる人こそ、幸福である。

もちろん、ストア主義に共通するある種の「内向き」さが鼻につかないわけでもなかった。けれども、それ以上に、瑣末的なことにこだわって、どのように生き、死にたいのかを直視しなかった自分を指摘されたように感じたのである。生活の安定も、社会的地位も、他人からの評価も、いらない。優れた研究を残し、それがいつかだれか一人にでも何らかの影響を与えられるならば。

こうして、若さゆえの「ストイック」さで、アカデミシャンをめざすことを決意した。いまでも、迷いが生じたときには時々、この決断を後押しした本書を手に取るのである。

本学教員からの著書寄贈

先生方から著書を寄贈していただきました。（平成18年6月以降）
図書館自由閲覧室の教員著作コーナーに配架して利用に供しています。

◎ 山田 浩 教授 （薬学部）
「すぐに役立つ！（治験コーディネーター）CRCスキルアップ実践マニュアル」
メディカル・パブリケーションズ 2006年

◎ 浅井 章良 教授 （薬学研究科）
「先端技術と倫理（生命科学のための基礎シリーズ）」 実教出版 2002年
「新しい遺伝子工学」 昭晃堂 2006年

◎ 木苗 直秀 教授 （食品栄養科学部）
「ワサビのすべて：日本古来の香辛料を科学する」 学会出版センター 2006年

◎ 小幡 壮 教授 （国際関係学部）
「海外授業報告書：ベトナム・カンボジア」 静岡県立大学国際関係学部東南アジア文化論 2006年

平成18年度日本薬学図書館協議会研究集会を開催

平成18年度日本薬学図書館協議会研究集会が8月24～25日の2日間にわたり、本学を会場に開催されました。今回は、「医薬情報スペシャリストとしてのスキルアップ」をテーマに、全国から薬学関係大学の図書館業務に携わる職員50名が参加しました。

1日目は、本学の三輪薬学部長が「新薬学教育への取組みと問題点」をテーマに基調講演を行い、「医療、医薬品情報の収集と提供」をテーマにして、日本製薬団体連合会の吉澤潤治氏、社団法人静岡県薬剤師会の大石順子氏、医薬品医療機器総合機構の藤上雅子氏による事例報告とグループディスカッションが行われました。

2日目は、東京都立中央図書館サービス部の吉田直樹氏をお招きして、「ICタグについて」をテーマに特別講演が行われ、その後、1日目のグループディスカッションの結果発表・講評が行われました。最後は、北海道医療大学総合図書館の平紀子氏による「JPLAの専門性と研修事業」をテーマにした教育担当理事講演が行われ、閉会となりました。

2日間を通じて、医療、医薬情報収集等に係る大学図書館の果たす役割の重要性を再認識するとともに、全国の関係図書館との情報交換を行うことができ、有意義な研究集会となりました。

教員の人事

採 用

（8月1日付け）
池田 哲夫 経営情報学部教授

昇 任

（9月1日付け）
江木 正浩 薬学部講師

退 職

（6月30日付け）
上平 美弥 食品栄養科学部助手

（8月31日付け）
加藤 大 薬学部講師
加藤 善久 薬学部講師

クラブ・サークル紹介

WPAS -ダブルパス- ～World Peace from Asian Smile～（旧アジアクラブ）

国際関係学部　国際関係学科2年　松野下　琴美

こんにちは！ WPAS-ダブルパス- ～World Peace from Asian Smile～（旧アジアクラブ）です。国際協力や世界平和をテーマに活動をしています。世界平和や国際協力というと、外国に向けての活動が主なのでは、とよく言われますが、私たちは「Think globally☆Act locally」をテーマに、頭では世界のことを考え、足は自分の地域で行動しようという理念の下に活動しています。講師を招いての講演会主催、県大の近くの里山で子どもたちと一緒に農作業体験、世界の諸問題について声を掛けて勉強会を開き発表の場を作る、地域で主催しているイベントにスタッフとして参加する。そして、それぞれがやってきたことを会合で情報交換をして、今後の活動の幅を広げていきます。メンバーはみんな明るく元気です。

子どもたちとじゃがいもの苗を植えました。早く大きくなあれ！

●「子どもたちの笑顔のために～自分に出来る一歩からはじめよう～」

「ミリオンフェイスキャンペーン」への御協力ありがとうございました。

去る6月10日、講師に京都の平和NGOテラ・ルネッサンス代表の鬼丸昌也さんをお迎えして、講演会を主催しました。後援申請、新聞社や学校への広報など、メンバー一人一人の力で、このイベントを作り上げていきました。今回は講演会だけではなく、7月の国連小型武器会議に向けて、武器の規制を求める「ミリオンフェイスキャンペーン」という世界160カ国で行われた顔写真署名を実施するにあたって、スタッフは事前に勉強会を開いたり、署名に協力してくれるNGOの方と打ち合わせをしたり、事前の準備が本当に大変でしたが、「今、世界で起きている問題」に自分たちが直接関わる良い機会となりました。当日は、鬼丸さんにアフリカ・ウガンダの子ども兵や小型武器について講演をしてもらい、その後、スタッフは、募金活動や参加者の顔写真署名をカメラで撮る作業をしました。このイベントが終わった後、参加者から「普段聞くことも無いような遠い国の話、でも深刻な問題を知るきっかけをくれてありがとう。」という声をもらったり、新聞で国連の動きを見たり、インターネットで調べてみたりと、自分たちが関わったことによって一段と関心を向けるようになりました。7月の国連小型武器会議前に、署名が目標の100万人を超えたというニュースを聞いた時はみんなで「わぁー！すごい！」と喜びました。160カ国の想像も出来ないほどの数の人々が、同じ思いで署名をしたのだと思うと、「私たちの行動が世界とつながった!!」と感じることが出来ました。

●「自分のできること」からはじめよう!!

今、世界で起きている問題は貧困、環境、政治、経済など、本当に多様です。私たちは、学生が学生に対して、同じ目線で、「こんなこと考えてみようよ！こんなイベントに参加してみようよ！」と呼びかけて、一人一人に何かが変わるきっかけ作りをしていきたいという思いで活動しています。その他にも畑の農作業、勉強会・発表会、地域でのイベント、外部NGOの集まりへの参加など、活動は多岐にわたっています。一人で動こうと思っても、なかなか重たい腰を上げることが出来ないことでも、みんなで呼びかけることで「よし！じゃあ私もやってみようかな！」と一歩を踏み出すことが出来ます。世界はすぐに変わるものではありませんが、何か行動をしなければ、変わりません。まずは「自分にできること」から、身近なことからはじめてみましょう！

WPAS連絡先：koto1119@yahoo.co.jp　松野下琴美

THE BIBLE CIRCLE *CLAY*

THE BIBLE CIRCLE “ CLAY ”では、そのなまえの通り、聖書についてどんなことが書いてあるのか研究？しています。『研究』といっても、何か難しいことをしているわけではなく、「これってどーゆー意味？」的なことを話し合ったりしています。

『バイブル』って言葉はよく聞くけど、キリスト教の『バイブル』って一体どういうものなのか、あまり良く知られてないのではないでしょうか。

『バイブル』は、実は、全世界でこの200年間で約4,000億部も発刊されて、約2,000言語にも翻訳されたすんごい本なんです。大ベストセラーなんです。

昔のえらい人たちは、
「私の生涯に最も影響を与えた書物は聖書である。」ガンジー
「もし牢屋にただ１冊の本を持ち込めるとしたら、私は聖書を選ぶ。」
ゲーテ
なんて言っています。

そこで“ CLAY ”では、そんなすごい本『バイブル』を実際に読んでみて、どんなことが書かれているのか探っています。活動内容は、クリスチャンの人、そうでない人を問わず、『バイブル』に興味がある人が毎週１回集まって、みんなで読んで、あれやこれや言っています。メンバーは、薬学部、食品栄養科学部、国際関係学部といろいろで、キャラもいろいろです。また、今年は７月に韓国からの留学生も参加したりして、internationlでした。毎週の活動の他には、ボーリング大会やクリスマス会とかやったりします。他にもいろいろ企画しています。

クリスチャン、国籍を問わず、世界の大ベストセラー『バイブル』に興味のある人は是非のぞきに来てみてください。

with 韓国留学生（7月）

THE BIBLE CIRCLE CLAY
☆じかん　every FRIDAY　18:30〜19:30
☆ばしょ　食品栄養科学部棟　5217 or 5216
☆れんらく　たけだ　こうへい
［E-mail ］co-hey88@ezweb.ne.jp

リール政治学院留学体験記

国際関係学部　国際関係学科４年　今野　菜津子

2005年9月から2006年5月までの9ヶ月間、私は静岡県立大学の交換留学プログラムによってフランスのリール政治学院に留学しました。留学の目的は、日本で勉強していたEUの政策や体制に対する理解を深めることでした。

名古屋と姉妹都市のリールは、フランス北部の工業都市で人口は約20万人、隣国ベルギーやイギリスなどを結ぶ交通機関が発達している街です。

リール政治学院：難関で知られるグランゼコールの一つ

留学先のリール政治学院はグランゼコールと呼ばれる大学よりも専門性の高い高等教育機関であり、フランス全土に9つある政治系グランゼコールのうちの一つです。生徒数は少なく、こぢんまりとした学校で政治・経済・行政・法律などを学ぶことができます。また、大規模な交換留学を行うEUのエラスムス協定校でもあるため、三年次の生徒は全て留学生でした。授業はフランス語、英語、スペイン語、ドイツ語で開講されていました。語学の授業は週に二回、希望すれば提携先の語学学校で受けることができました。一般的にグランゼコールはエリート養成校と呼ばれ、日々勉学に励み政治家や官僚を目指している生徒も少なくなかったようです。そのため、授業のレベルは私にとって至難を極め、求められる課題を試行錯誤で提出する日々が続きました。言語の問題はもちろん最大のものではありましたが、それ以前に課題に取り組む方法論が厳格かつ緻密であり、それをマスターするまでにずいぶん時間を要したように思います。しかし、この他国の研究方法を垣間見れたことは、この留学を通して得られた貴重な体験の一つです。その結果、単位を取得して帰国できたことを私はとても嬉しく思っています。

留学生達とパーティーで

激変のフランスを体験して

また、留学中に体験した貴重な出来事に、フランスでの暴動と学生運動があります。日本とは比べ物にならないデモの規模や、学生の気迫を間近に見ることができました。特に、冬の暴動は人種差別に端を発した事件でありましたが、それをきっかけにリール政治学院でも居住地域による入試制限制度が見直されるなどの措置がとられました。日本では出会うことも少ないかもしれませんが、フランスには人種差別がはっきりと、隠される事なく存在しています。移民が多く、人種が混ざり合っているフランスならではの出来事でした。もちろん、その間はしばらく夜間の外出は控え、昼間でも注意して生活していました。

学園封鎖時のリール政治学院

3月には、CPEと呼ばれる初期雇用契約に関する法案をめぐり、高校生や大学生が全国的な学園封鎖とデモを行い、労働組合を巻き込んでゼネラルストライキを起こしました。法案によって雇用後2年間は雇い主が理由を明言することなく解雇できるようになることから、若者が雇用の不安定化を懸念し起こした行動でした。私はただただ、その学生達のパワーに圧倒され、日本にはない学生達の行動力に気おされました。最終的に政府が折れ、学生達が勝利を勝ち取る形になりました。このようなフランスでの日常を経験したことが私の考え方に強く影響を及ぼしました。フランス人学生の意志の強さと行動力を見習い、これからの人生に活かしていけたらと思います。

ストラスブールで行われた学生のデモ集会

最後に、このようなチャンスを与えてくださって静岡県立大学と、御尽力してくださった先生方にこの場を借りて御礼を申し上げます。ありがとうございました。

国際関係学部　国際関係学科４年　竹内　海予

私は、平成17年9月から平成18年6月までの10ヶ月間フランスで交換留学生として生活し、勉強する機会を頂きました。初めてづくしの中で辛いことも楽しいことも味わうことが出来ました。その中でたくさんの人に出会い、助けられて有意義な留学生活を送ることが出来たと思います。

リールでの生活について

私が暮らしていたリールという街は、フランスの北東部にあるノール県の中心都市で、パリ、ブリュッセル、そしてロンドンへ鉄道を使い短時間で行ける場所柄です。街には、地下鉄やトラムまたバスが走り、それなりに大きな街です。また、気候は、典型的な北ヨーロッパのもので、冬の寒さはとても厳しかったです。

日曜日のフランス

私は、リールで寮に住んでいました。寮といっても普通のアパートと同じで特に変わった経験はありませんでしたが、管理人さんが感じのいい人で住宅の手続きなどで分からないことがあって質問をしに行ったときなどは、言葉が上手く通じない私にも根気良く教えてくれてとても助かりました。フランスの学生寮というのは、同じ大学の生徒だけが住んでいるのではなく、形態は学生用のアパートと言えるでしょうか、いろいろな大学に通う人たちが住んでいます。フランス人学生がほとんどですが、留学生も何人か住んでいました。しかし、同じ学校に通う留学生は部屋をシェアしている人が多かったと思います。それは、フランスで外国人が部屋を借りて住むには、フランス人の保証人が必要だからだと思われます。一方、頼もしいのは、支援団体に申請すると家賃の援助がもらえることです。低所得者や学生への支援なのですが、外国人であってももちろんもらえました。さすがフランスといった感じですね。この援助金の申請もなかなか苦労したのですが、最終的にはいくらかもらうことが出来ました。他にも銀行の手続きやインターネットの契約など困ったことはたくさんありましたが、その都度、多くの人の手を借りて達成することが出来ました。

学校生活について

学校では、２年生と４年生の授業の中から選んで登録することができました。一般の学生と同じ授業に出席していたので、講義の内容以前にフランス語が分からなくて苦労しました。同じ授業に出席していた留学生の間でノートを回しあったり、友達になったフランス人学生に教えてもらったりしました。テストは筆記のものと口頭のものがありました。口頭のものはすごく緊張しますが、先生の側でも理解しようと聞いてくれるので助かりました。

政治学院では授業の一部として、週に２回語学学校に通わせてくれました。この語学学校では、他の大学に通う留学生とも知り合うことが出来ました。びっくりするような国からも留学してきていて、その話を聞くのは楽しかったです。先生も初めは怖い印象だったのですが、すごくいい先生で長期休暇でも開講してくれました。同じクラスのドイツ人学生と話しているときに、香港を日本だと勘違いしているので驚きました。これは大げさな例かもしれませんが、留学期間でヨーロッパ人は私たちが考えているよりアジアの全体像がわかっていないということを感じました。

広い世界に出て、今までと違った意識を持つことが出来ました。それは、世界という大きな目から見た日本やアジアだけでなく、日本人･アジア人としての自分という今までにない意識でもあります。たくさんの人と出会えたこと、様々な経験とあわせて貴重な10ヶ月間を送ることが出来ました。

フランス人を招いて

高校生が経営情報学部の授業を体験！

「オープンレクチュア 2006」

「経情の授業科目にはどんなものがあるのだろうか」をキャッチフレーズに、高校生を対象とした経営情報学部主催の「オープンレクチュア 2006」（第5回）が、去る6月11日（日）に開催されました。経営情報学部では、「経営学」と「情報学」の両方の知識や技術を持ち、幅広い分野で活躍できる人材を育成することを目指しています。しかし、経営情報学部の授業科目は、高校生にとって馴染みが薄く、わかりづらいものもあります。そこで、実際に高校生に授業を体験していただくのが一番と考え、この企画が生まれました。参加者は76名（保護者を含む）で昨年の67名を上回る多くの方が来られました。今年は県外からの参加者も多く、遠くは北海道から参加された高校生もいました。今年のレクチュアは、午前に2つ（尹「企業論」；山浦「組織行動論」）、午後に2つ（渡部「情報ネットワーク」；小林「経営数学」）が行われました。高校生の皆さんは、学校での授業とは全く違った本学部のレクチュアに好奇心をくすぐられているようでした。レクチュア終了後、保護者を含む高校生と教員との交流会が催され、大変盛り上がりました。次回は10月7日（土）に「オープンセミナー 2006－経営情報学部にはどんな先生がいるのだろうか」（第5回）が開催されます。オープンレクチュアは講義形式でしたが、オープンセミナーはゼミナール形式（1セミナー20名の定員制）でおこなわれ、高校生と教員、高校生同士での双方向のディスカッションがおこなわれます。

夏休みファーマカレッジ2006開催

体験してみよう！「薬の開発と適正使用」

県内高校生を対象とした「ファーマカレッジ」は、本年で8年目となり、夏休み期間中の8月9日、10日の2日間で実施されました。

高校生が大学の研究者や大学院生から直接指導を受け、実験や実習を通じて最新の知識と技術にふれながら、薬学の世界を体験する機会を提供するものです。

例年、多くの参加希望者があり、本年も選考により、予定より5名多い35名に参加してもらい、「フラスコの中で薬をつくろう」など5名ずつ、7つの体験テーマに分かれ、薬の開発から人体に使用されるまでの課題研究に取組み、研究発表、総合討論と交流会を通じて、薬学に対する興味や理解を深めてもらいました。

静岡県学術文化交流団がトルコ・ロシアを訪問

平成18年6月2日から9日までの8日間、学術、文化両面での交流を図るため、トルコ（イスタンブール）・ロシア（モスクワ）を石川静岡県知事を団長とする11名の静岡県学術文化交流団が訪問しました。本学からは、西垣学長、西山国際関係学研究科長、国際関係学研究科の六鹿教授及び国際関係学部の島田助教授の4名が同交流団に参加し、両国との学術交流を深める役割を果たしました。

前半のトルコにおいては、イスタンブールにあるボアジチ大学を訪問し、双方の大学が各々研究教育状況について説明し合った結果、研究教育面で協力関係を構築していくことに有意性が認められることで一致し、今後、学術交流協定の締結に向け、作業を進めていくこととなりました。

トルコ・ボアジチ大学のキャンパスにて

後半のロシアにおいては、モスクワにある本学の大学間協定校、モスクワ国立国際関係大学を訪問し、これまでの交流が、両大学の教育研究にとって有益であったことを相互に評価し、今後とも交流を継続させていくことを確認しました。さらに、長年にわたる教員・学生の交流を通じて、世界平和や国際協力、友好の進展に貢献した功績等により、アナトリー・V・トルクーノフ学長から石川静岡県知事に名誉博士号が授与されました。

タイ王国国立チュラロンコーン大学薬学部と学部間協定を締結

薬学部（三輪匡男学部長）は、タイ王国国立チュラロンコーン大学（Chulalongkorn University ）薬学部との間で学術交流についての協議が整ったため、去る7月20日、学部間の交流協定を締結しました。

協定締結の経緯としては、独立行政法人日本学術振興会がアジア諸国との交流において実施しているプロジェクト（拠点大学交流事業）を通じて委嘱を受けた本学薬学部教員が、これまでチュラロンコーン大学薬学部と共同研究・訪問講義等を行ってきたことから、これらを継続・発展的に遂行するため、協定を締結することとなりました。

学部間協定調印式：チュラロンコーン大学にて

調印式は、酒井県企画部理事、稲山副学長、野口教授、今井教授の4名が訪タイし、国立チュラロンコーン大学で行われました。

薬学部は、中国浙江大学薬学院、タイ王国コン・ケン大学医学部・薬学部及びマヒドン大学熱帯医学部・薬学部と学部間協定を締結しており、今回で4校目となります。

同協定は、教員や学生の交流、共同研究やシンポジウムの提携、研究論文等の情報交換での連携が主な内容となっています。

チュラロンコーン大学は、その大学名がチュラロンコーン大王と呼ばれた国王ラーマ5世に由来し、その後継者であるラーマ6世が1917年に創立したタイで最も歴史のある大学です。現在19の学部と16の専門研究機関や専門学校が設けられ、270以上の研究プログラムが実施されていることから、薬学教育と研究の一層の充実が期待されます。

谷田風土記―91

静鉄電車の起源

県立大学に関係の深い『静岡鉄道』だか、その始まりは、明治41年（1908年）である。明治になり、清水港からお茶が積み出されていたが、最初は静岡の茶町から、いわゆる『倍荷車（べかぐるま）』という牛車か大八車、やがて馬車などにより運ばれていた。輸出の増大にともない、輸送力拡充がとなえられ、静岡～清水間に『軽便鉄道』開設の声があがり、明治41年5月『江尻鉄道』が開通した。清水駅西側から清水波止場までの短距離、これは明治22年（1889年）に開通した『国鉄東海道線』清水駅と連絡するものであった。その明治41年12月、静岡鷹匠町～清水波止場間が通じた。

『最初は国鉄線路を利用』

まだ単線であったが（複線化は昭和9年）、鷹匠町～波止場間は一時間六分かかり、運賃13銭。一日24回運転で、当時としては画期的なものであった。

機関車は小型SL，定員30名、途中3か所で国鉄の線路を借りたという。時速20キロ、あまり事故はなかったといわれている。

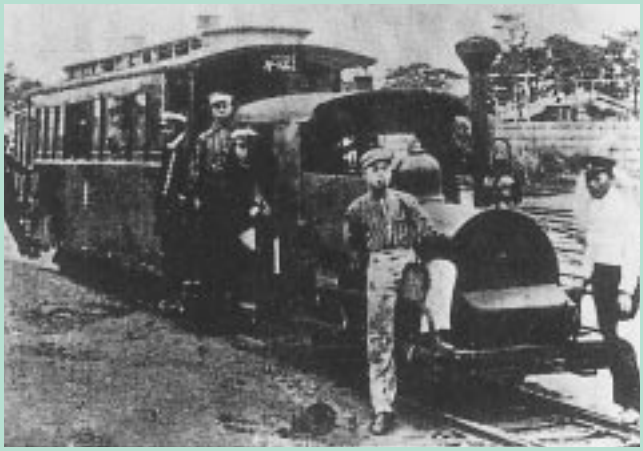
大正8年（1919年）静鉄電車の前身『駿遠鉄道』に買収され、翌年電化されている。当時の駅は、鷹匠町…台所町…きよみず公園前…長沼…古庄…桜井戸…草薙…上原…追分…入江町…江尻新道（現在の新清水）であった。

やがて路線は、西は静岡の茶町（厚生病院そば）、東は興津まで伸びて行った。JR静岡駅北口の『ホテルアソシア』前が国鉄と連絡する静鉄線の駅であった。

特記したいのは、戦後、国鉄東海道線が脱線事故を起こしたとき、一時的に国鉄として線路が利用され、数日間だけだが、『東海道本線』になったことである。

今も静岡市の発展に大きく貢献しており、昭和62年4月の『静岡県立大学』開学時に、『特別記念切符』が発行されている。

（国際関係学部教授・高木桂蔵）



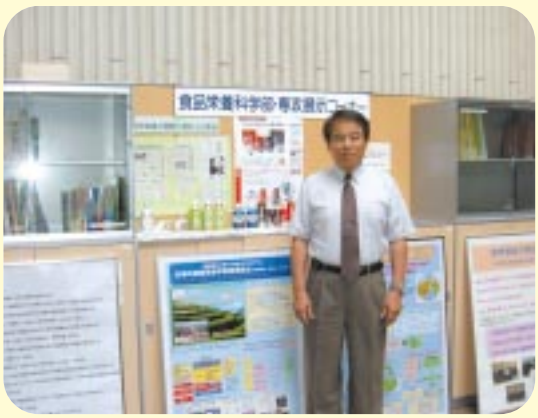
軽便と運転手

食品栄養科学展示コーナーの開設

食品栄養科学部長　木苗　直秀

食品栄養科学部及び大学院食品栄養科学専攻では本年6月より教員の研究業績、学生への推薦書、教員が著述した専門書・教科書等を学部棟1階のカレッジホールに展示しています。また、静岡県立大学21世紀COEプログラムや都市エリア事業“フーズ・サイエンスヒルズ”（いずれも文部科学省で採択されたプロジェクト）を通して教員が係わって開発した食品や飲料などを陳列してあります。

現在、卒業生から自身が係わった開発商品などの提供をお願いしています。この展示コーナーの内容をさらに充実させていく予定ですが、学生、教職員とともに学外からの訪問者に是非御覧頂きたいと思っています。



学内ニュース「はばたき」への寄稿を大歓迎！

教職員・大学院生の皆様の受賞、研究助成への採択、学会・研究集会の案内、クラブ・サークル活動報告、ボランティア活動などの寄稿をお待ちしています。大歓迎します。

事務局経営課・企画スタッフ（管理棟２階）あてにお願いします。E-mail:kikaku3@u-shizuoka-ken.ac.jp

企画・編集：静岡県立大学広報委員会（事務局　ＴＥＬ　０５４－２６４－５１０３）
静岡県立大学ホームページアドレス ： http://www.u-shizuoka-ken.ac.jp